

## 四季を彩る200種の木々



小石川樹木園は、理学系研究科附属植物園（小石川植物園）の北東端にあります。本園は、1909（明治42）年に植物園の一部（0.66ha）を永久借用して設置され、樹木の実生増殖の研究などが行なわれてきました。現在は、技術基盤センター所属の技術職員1名が、園内を管理しており、森林関連専修の学生実習や、樹木や森林昆虫に関する研究などが行われています。また、2003年には根圏観察装置（ライゾトロン）が設置され、マツタケの人工栽培に関する研究などに利用されています。

園内には、日本の森林を代表する樹木や外国産の樹木などの約200種が植栽されていて、春の新葉や秋の紅葉、様々な色や形の花や果実など、四季折々の美しい姿を見せています。



なかでも本園の設立前から生育しているクスノキは、幹周長が6mを超えており、文京区内のクスノキの中で5位以内を争うほどの巨木です。また、早春に濃い桃色の花を咲かせるサクラは、園外からもよく目立ちます。このサクラは、2種類のサクラが交配して生まれた雑種のようなようですが、詳細は分かっていません。新しい栽培品種になる可能性があるため、大切に管理しています。その他にも、絶滅危惧種Ⅱ類のクロベイツヤというカエデや、韓国のウルルン島だけに自生するタケシマブナなどの貴重な樹木も植栽されています。これらを含む胸高直径5cm以上の樹木は、立木位置図を作成して管理しています。

園内では、ハクビシン、オオタカ、アオダイショウ、アズマヒキガエルなど、様々な種類の動物も見かけます。時に歓迎できないものもいるのですが、動物にとっても本園は、都心の貴重な生息場所になっているようです。

これまで本園は、主に森林科学関連の教職員や学生に利用されてきましたが、他分野の方の利用も可能です。ご興味のある方は、是非、お気軽にお問い合わせ下さい。

技術基盤センター・森林植物学研究室

佐々木 潔州 技術専門員